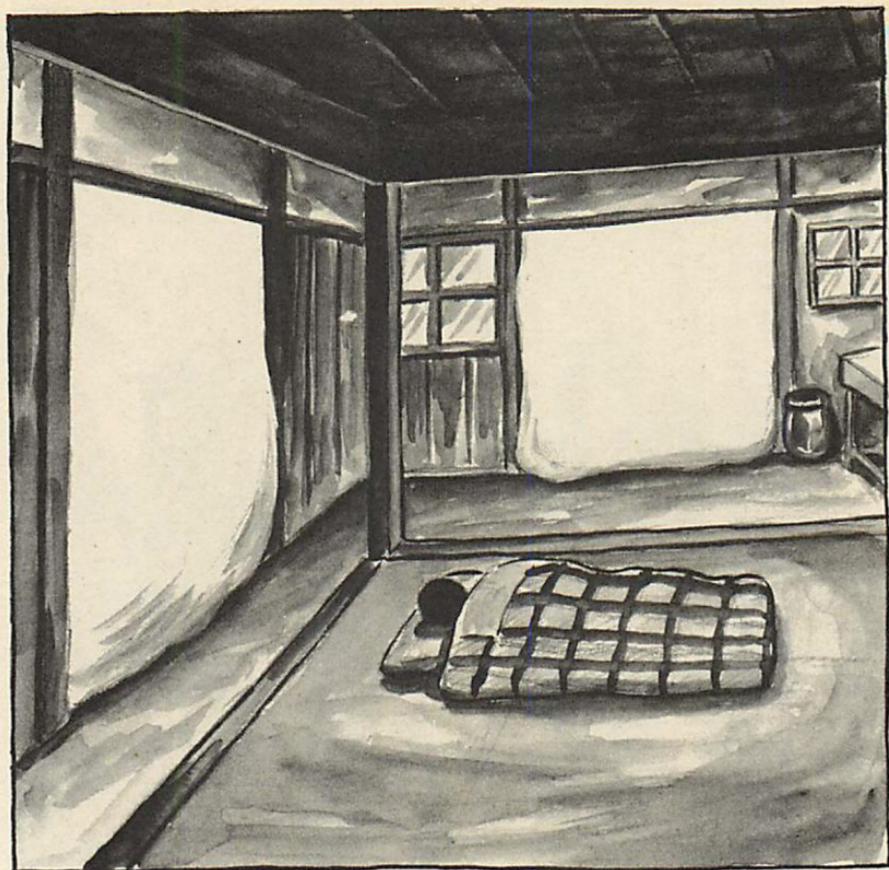


外のふくらみ



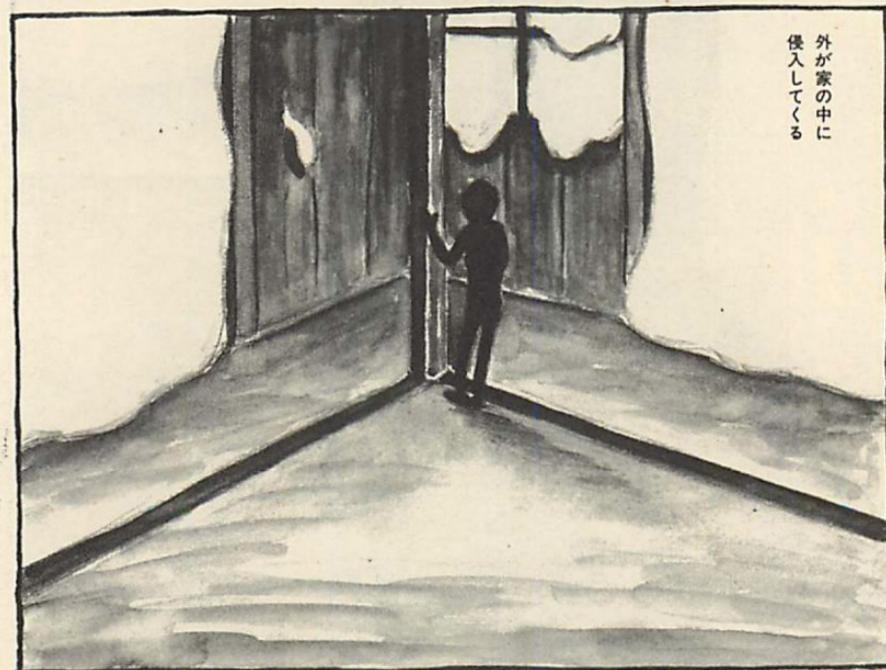
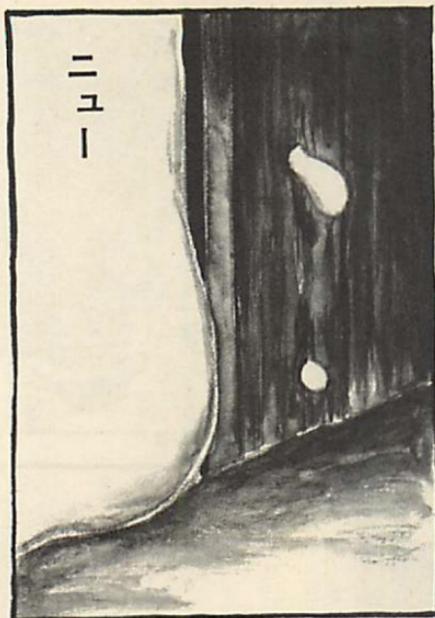


今日は  
ひどく外が  
ふくらんで  
いるようだった

朝  
目をさますと

※外のふくらみ









※外のふくらみ





何事が  
起きたのか  
行きつけの  
喫茶店へ  
様子を  
みに行く



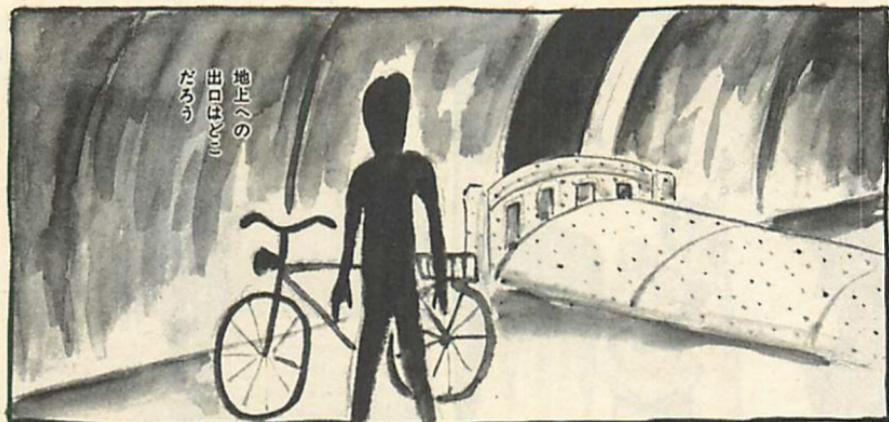


恥かしいな  
こんなボロ  
自転車を  
大切そうに



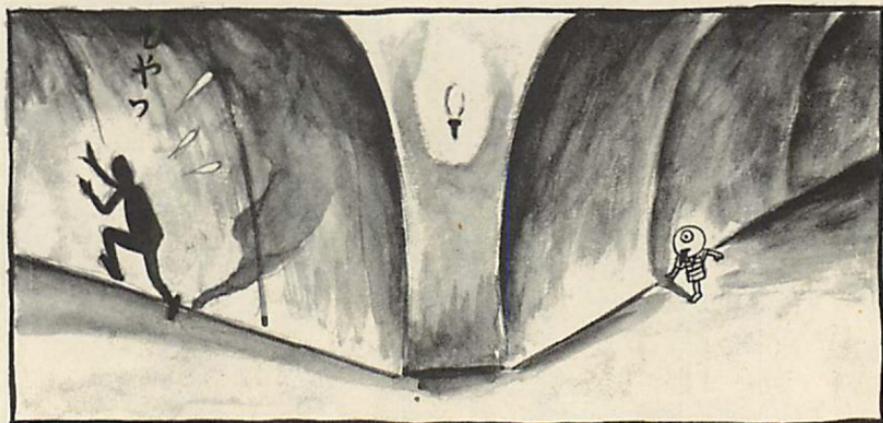
いつのまに改装  
したのだろう 豪華  
な店になってしまった



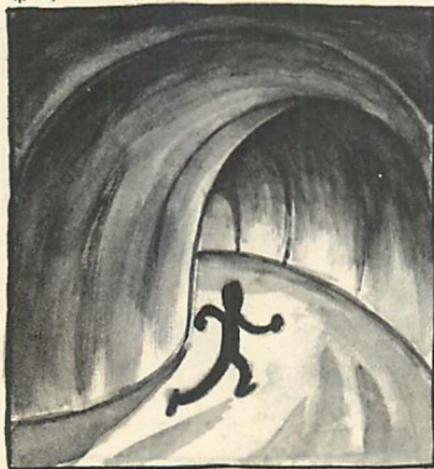




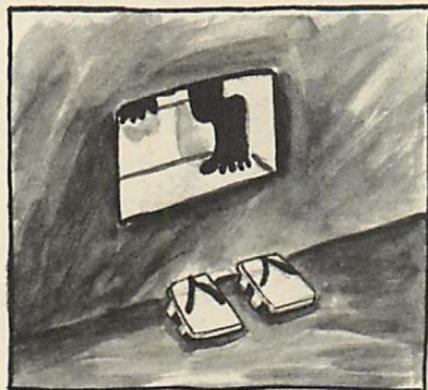
実際の  
一ツ目小僧は  
こんな小人  
だったのか

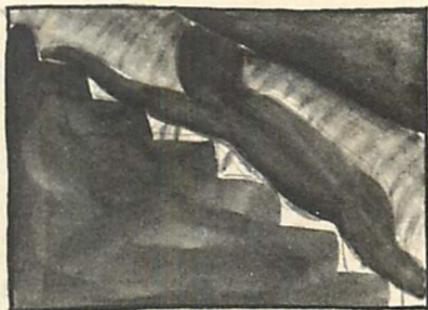


出  
口  
は  
ここ  
だ  
ろ



おかし  
ごとくも  
出口  
がない





## あとがき

つげ義春

私には「不安神経症」という持病がある。周期的に重症になり、そんなときは不安でいてもたってもいられなくなる。心の病まよいなのに体にいろいろの症状が現われ、心身症も併発するのである。不安の原因は漠としてわからないが、しいていえば「自分が存在していることが不安」なのである。それは「自分が存在しなければ安心」という始末の悪い状態なのである。

私は自分が心配でならない。自分がいつかどうにかなってしまうのではないか、という不吉な予感に悩まされている。具体的にどうなってしまうのかわからないが、漠としているだけにいつそう不安でならない。通院している精神科の医師は、自分にこだわりすぎるからいけないのだと云う。自分に無頓着になることをすすめるが、それは禅の無に通じる一種の悟りであって、私にはどうていきそうにない。

私は偶然存在していると認識しているが、それは理性で考えることであって感情はともなわない。だから今後も不安は解消されないだろうが、このような傾向は私のマンガにどのような影響をおよぼしているのだろうか。もし自分にこだわることをやめにしたら、マンガは描けるのだろうかという疑問もある。

# 夢の散歩

